研究の栞

日本古建築研究の栞（第二十一回）

工學博士　天沼俊一

第三十　扉　（中）

前號に於いて、私は飛鳥より江戸に至る板扉の變遷を荒增述べておいたが、このほかに「棧唐戸」とよぶ種類がある。

（ロ）棧唐戸

鎌倉時代に宋から入つてきた新樣式の建築に用ひられた扉は、從來のもの、卽ち板唐戸とは大分異なつてゐた。全體としては平たい板であることは勿論であるが、縱横に組みたる框や棧で骨格を造り、この骨の横へ其長さに沿ひて溝ををついて、そこへ薄い板を入れて一枚の戸にしたのである。框でも棧でも、實用の上からいふと、長方形の斷面をもつたある長さの木を直角に組み、其間に薄い板を入れゝば出來るのであるが、夫れでは餘り殺風景であるから、多くは夫れに面をとつたり、其間に連子や格狹間を入れたりして裝飾をしてある。尤も中には相當に立派なものでありながら面のないのもあるが、これ等は當初からさうしたものもあらうし、又は後にくみかへたのもあらうから、一概にはいへない。

初めのうちはその位ですんだが、後には夫れでは滿足が出來なくなつた。桃山時代になつて彫刻が發達してくると、扉の面まで彫刻を充塡しなければ氣がすまなくなつてきた。其爲め入子板には薄肉にいろいろのものを刻んで夫れを嵌め込む、ことを始めた。さうして江戸時代に入り、贅澤な建物例へば日光廟の建築等に於いては、桟や框に蒔繪をしたり、入子板へ幾何模樣をほつて金箔をおき、其上に極彩色の薄肉彫刻をはりつけたり、或は別の木を以て象眼をしたりした、のなどが出來だしたのである。

以下各時代のなるべく代表的實例を少しづゝ擧げて記述を試みやう。

鎌倉時代

のものでは、唐樣と思はれるのは相當に數多くあるが、天竺樣とみて差支ないやうなのは極く少ない。實は唐樣だの天竺樣だのと分けるのはよくないのかも知れぬ、といふのは、天竺樣に限られたもので、先づ確かと思へるのは、ある一つの建物のうちの二個所に殘つてゐる丈けで、他のは唐天兩方に用ひられてゐるからである。併しこゝには便宜分けてかいておく。

唐樣の扉は、最も簡單な場合には切面をとつた桟で區劃をつくり、其内に平たい板を入れたもので、普通縱横の桟は一本づゝであるが、時としては吹寄せになつてゐる。吹寄せの場合には横は多く上・中・下と三個所、又は四個所さうなつてゐるが、また中の桟もさうなつた（例へば第百三十七圖）のもある。これなどは先づ珍らしい方の例で、當代で竪桟が吹寄になつたのは少ないやうである。

さうして多くは同圖にみる樣に、上のところに細かい連子を入れる。尤もかゝる場所へ連子を入れることは、既に早く奈良時代前期に行はれたのであるから（前號第一〇二頁第十九圖㋑及び第一一七頁上段參照）、これは當代で發

明された新案ではないが、あれなどよりは遙に細いのを入れたのが、全體の扉とよく調和がとれてゐるのである。後に記す樣に、天竺樣の四角な太い格子よりどの位いゝか判らぬ。彩色がしてあるのでは、いふ迄もなくこゝは綠靑で塗つてあるから、扉の他の部の丹色や、壁の胡粉と對照上甚だ綺麗である。

斯樣な連子にも、また第百三十七圖の如く間のすいたのと、第百三十一圖㋕・㋖の如く間のつまつた洗濯板と、二種類ある。併し何にしても古いのは、みんな連子が細いから、法隆寺五重塔の夫れの樣に、兩方から押潰したといふ感がないから、見たところ甚だよろしい。

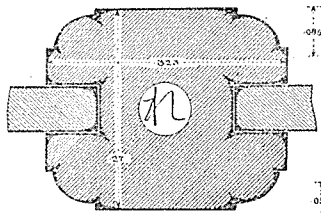
此の種の扉は、普通兩面卽ち表も裏も變りがないが、また時には棧は表丈けで、裏は一面に平たく張つて夫れに繪をかいたのがある。奈良市東大寺三昧堂（通稱「四月堂」、法花堂の側面に對し東面して建つ。奈良の人は「シンガツドー」と發音する）の扉は其の一例である。尤もこの扉は、元來この建物に附屬してゐたか、或は他からもつてきたものか其邊はしつかり判らぬ。下の方が可なり切斷してあるやうだが、此の堂を改造したとき――したとして。どうも此の堂は變なところが澤山ある樣であるから――切り縮めたか、さもなくば、他の建物の扉丈け殘つてゐたのを、下を切つてこゝへ應用したものであるかは、未だ研究したことはないが、夫れは夫れとして、半面棧唐戸の一例としても差支はあるまい。尙ほこれは、各棧や框は切面ではなく、何れも唐戸面（第百三十一圖㋕・㋖の樣に）がとつてある。

天竺樣　のは實例に乏しいこと前述の通りであるが、其唯一の例は上醍醐の經藏にある。經藏のでも外側のはいけない。正面三間の入口に吊込であるのは何れも新らしい、恐らく先年修理の際、內側のに倣つて造つたのであらう。內外陣境と內

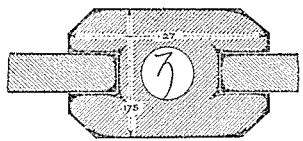
(い)
(ろ)
(は)
(に)
(ほ)
(へ)
(と)
(ち)
(り)
(ぬ)
(る)
(を)
(わ)

第百參拾壹圖　鎌倉時代以降格唐戸格斷面十種

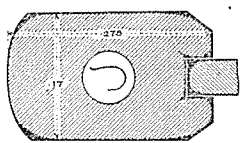
大正十五年二月十五日　日曜日　雨



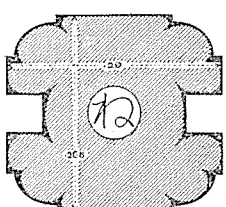
唐招提寺講堂

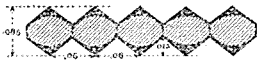


不退寺本堂

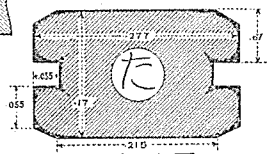


海龍王寺金堂

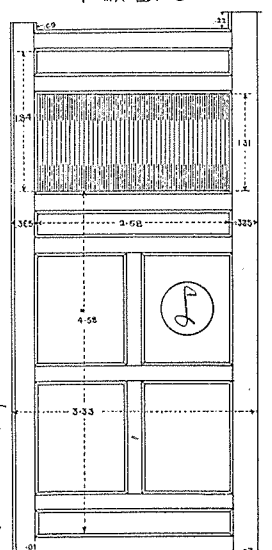




扉連平斷面



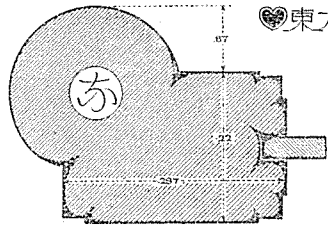
中格斷面

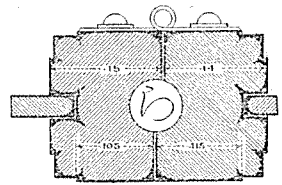


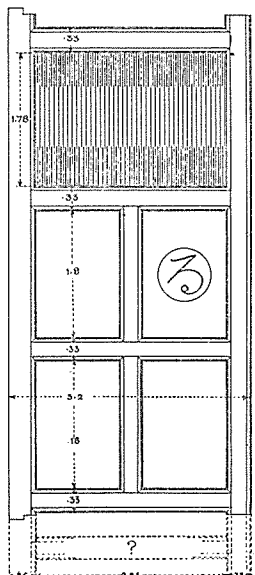
東大寺大湯屋

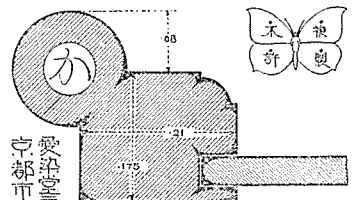
東二月堂法華堂扉連平中格詳細及扉立面圖　立面圖は半は見取で詳細の寸法はこちらかった

東大寺佛殿兩折格唐戸

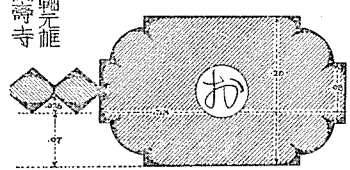




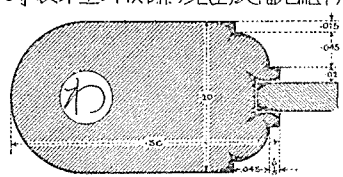


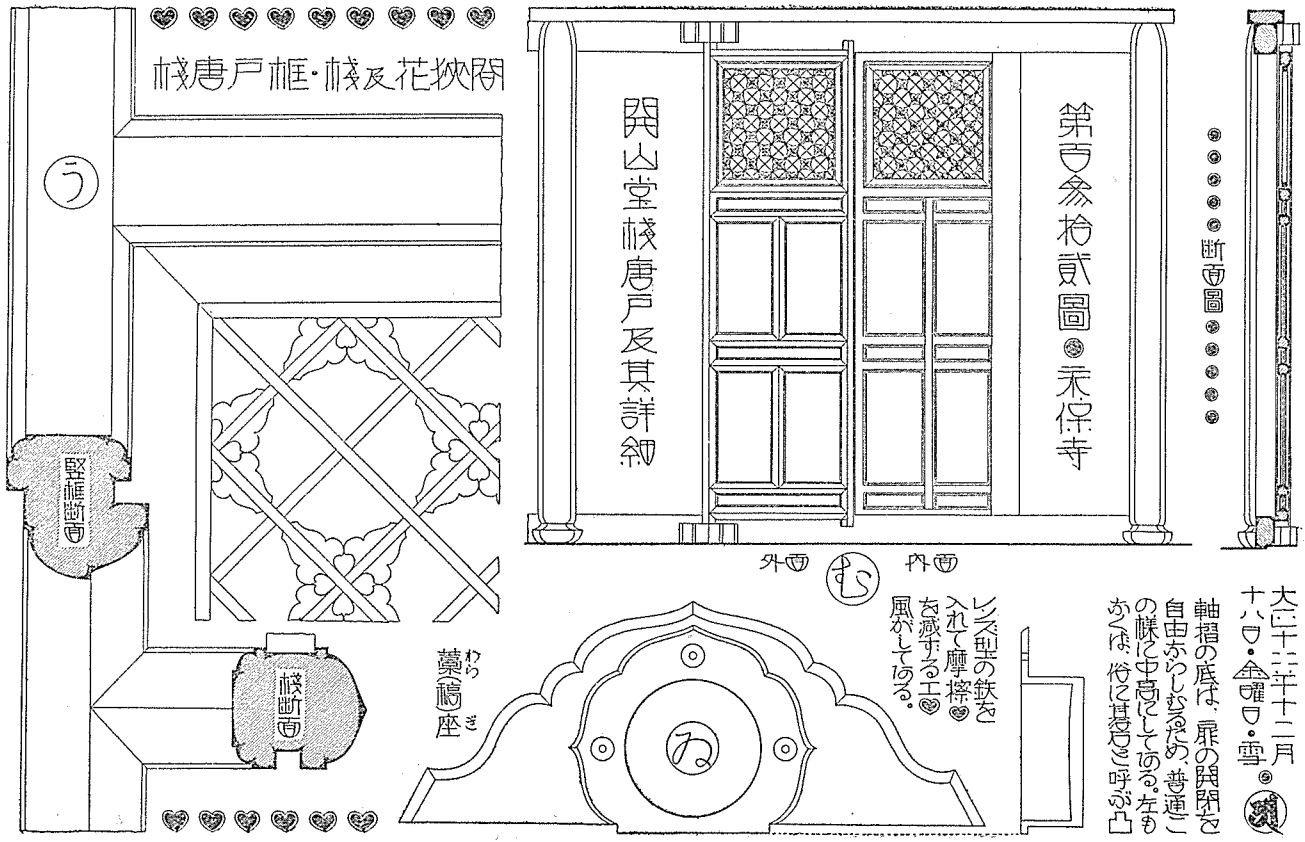


愛染堂扉軸元框
京都市萬壽寺



東大寺法華堂外側扉先(上)及軸元框(下)

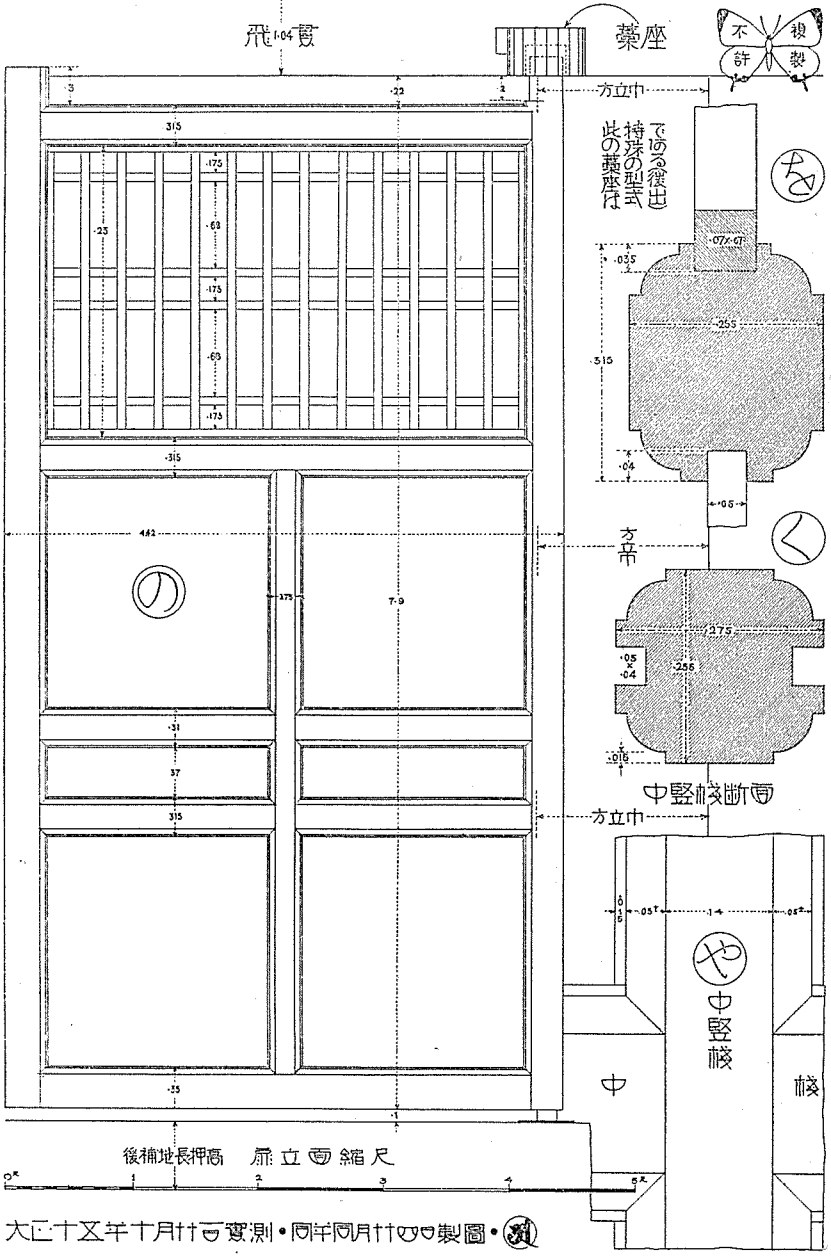




大正十二年十二月十八日・金曜日・雪

軸摺の底は、扉の開閉を自由ならしむるため、普通この樣に中高にしてある。左もあくば、特に其旨を呼ぶ凸

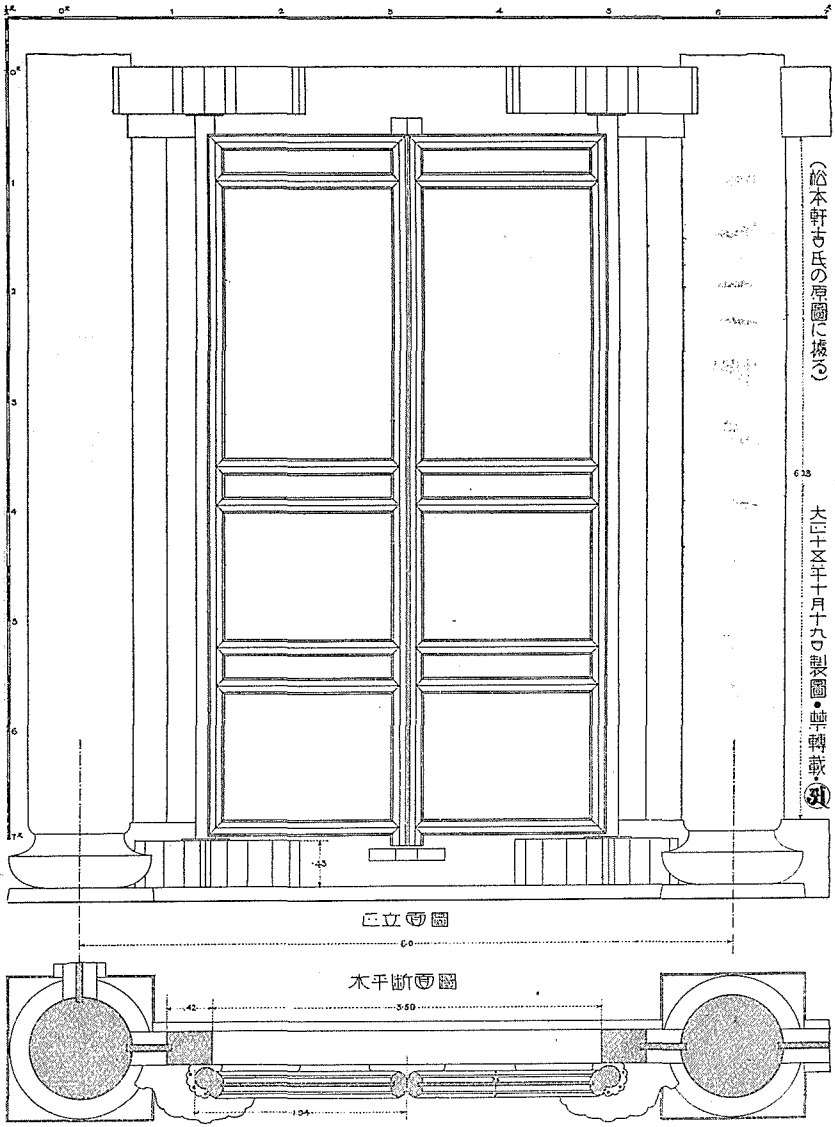
第百參十參圖　浄土寺浄土堂北側格子戸



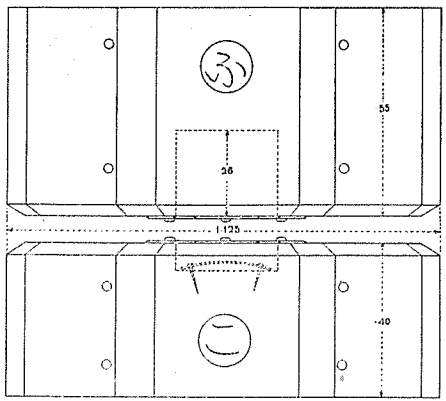
大正十五年十月廿四日實測・同年同月廿四日製圖

第百卅又圖　建長寺昭堂校唐戸

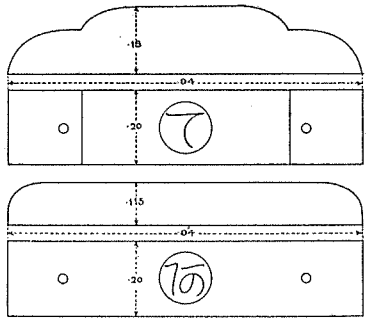
縮尺



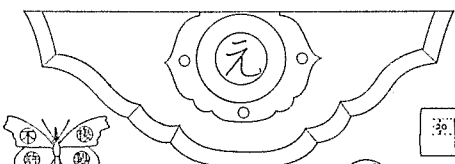
第百參拾肆圖
東福寺三門上層格子戸詳細



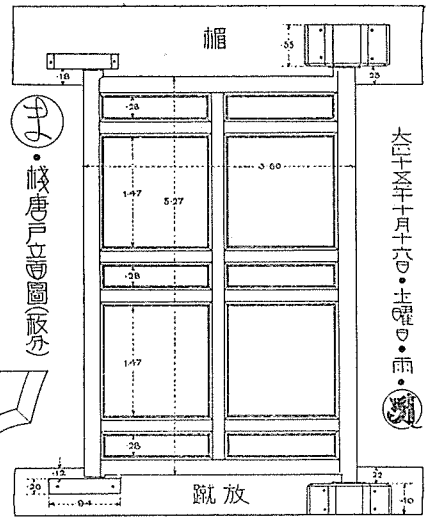
上及下藥座側面



扉止木(上及下)

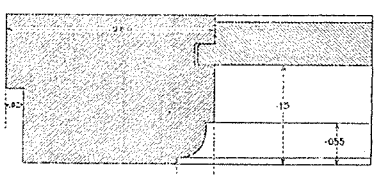


藥座平面

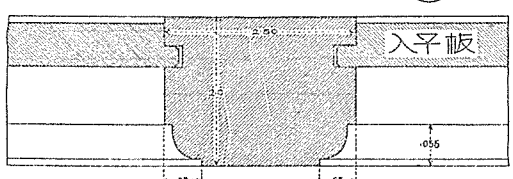


格子戸立面圖(板分)

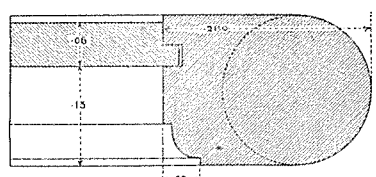
大正十五年十月十六日・土曜日・雨



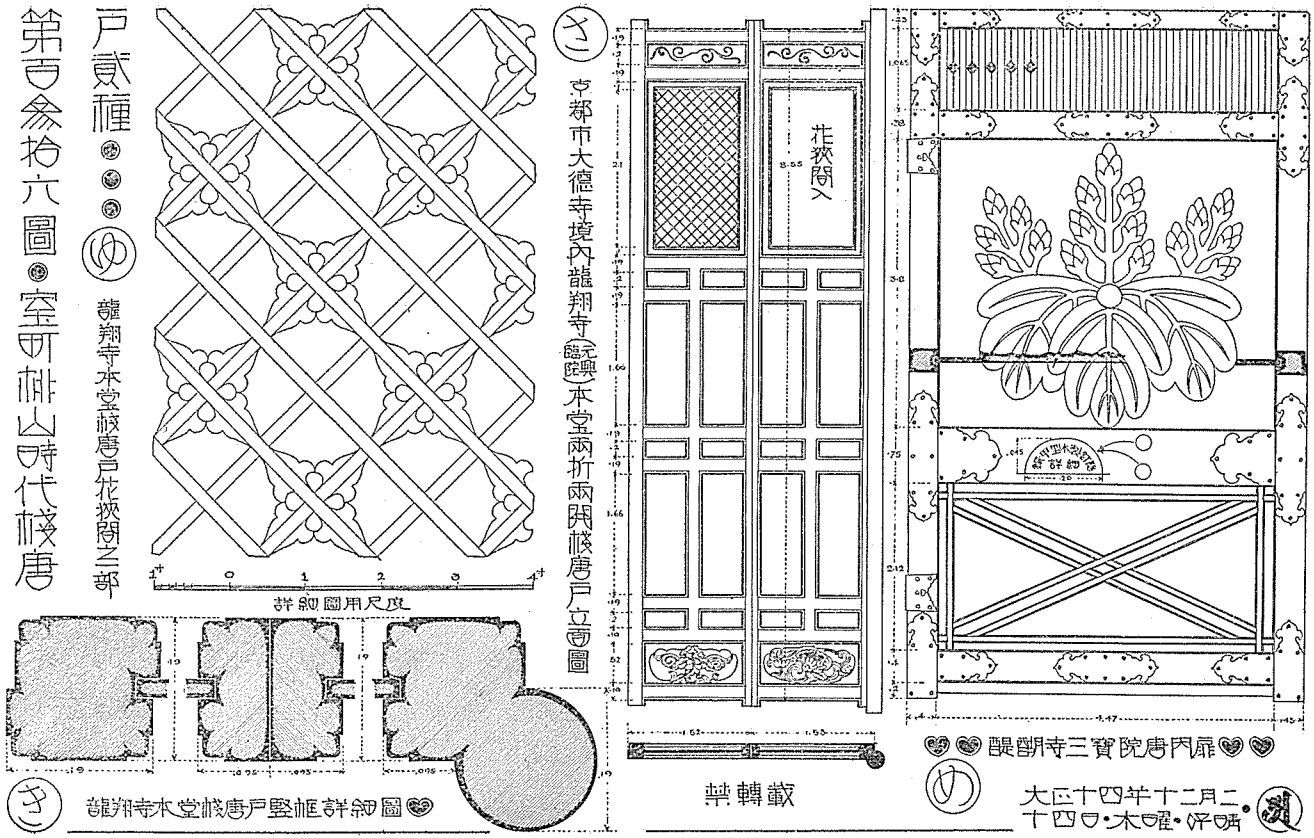
手先框



中縦格



軸元框


第百參拾六圖●室町桃山時代桟唐
戸貳種●●●
(ゆ)
龍翔寺本堂桟唐戸花狹間之部
(さ)
京都市大德寺境内龍翔寺(瑞峰院)本堂兩折兩開桟唐戸立面圖
花狹間
戸尺用圖詳
(き)
●●圖詳細竪横戸唐桟堂本寺翔龍
戴轉蝶
●●扉内唐院寶三寺醍醐
(め)
大正十四年十二月二十四日・木曜・晴

陣の内にある經室のとが古い。兩方共當初のものとみてよからう。

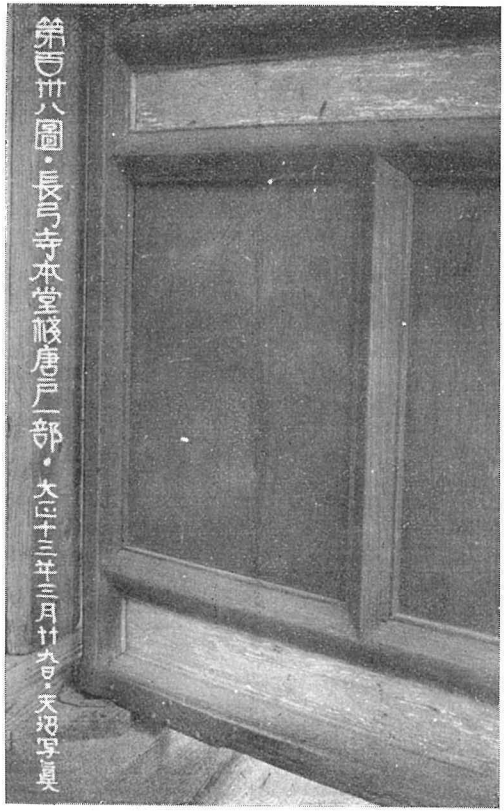
此れ等は第百三十圖に示してある。(い)は内外陣境ので、唐戸面をとつた桟が縱に一本横に三本あり、吊元のところには「吊元框」に別に軸摺の本がくつついてゐて、其先が藁座の中に入り込んでゐる。斯樣な考は未だ嘗てなかつたところで、此の經藏が建久六年にできたといふのだから、確かにこの時に初めて試みたのであらう——播摩の淨土寺淨土堂は建久三年、同本堂(當初の)は建久四年といふのだから、當初のまゝ殘つてゐたら勿論この方が古いのである。淨土堂北側扉の藁座は二つ共うまく行けば當初のもの、さうでないとしても鎌倉時代を降る事はあるまい——と思はれる。さうすると、かゝる式を外國直輸入とするか、我國で考へ出したとするか考へてみる必要がある。

扉の樣式にせよ藁座にせよ、かゝる前例のないものが、降つて涌いた樣に出來ることはない、だから新式の建築と一所に宋から入つてきたとみるのが至當であらう。多くの禪宗建築に於いて、殆んどきまつた樣に、軸元框のところが框其物より更に軸摺の木が、斷面圓形に突出してゐるのは、天竺樣のこの部が發達したのか、或は同じ祖先から分れて、各々が其樣式にあふ樣に進化したのかであらう、と考へられなくもない。何でもない樣な事柄で、氣がつかねば夫れまでゞあるが、穿鑿をしだすと限りのないものである。

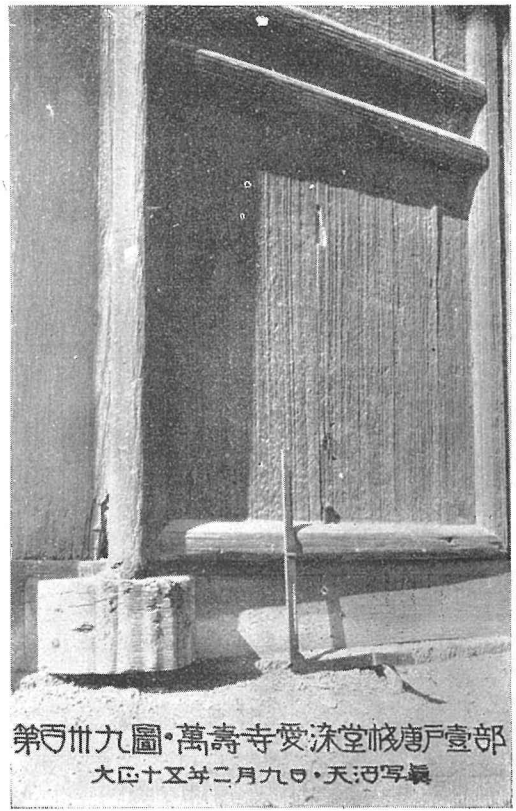
一番上の間は縱横の格子がはいてゐる、横も縱も八間づゝある。其詳細も圖示してあるが、切面のとつてある四角な木から成つてゐる。此の種の扉としてはまだ大分に Crude なところがあり、第百三十七圖などに比べると、相互の間に可なりの距離があることが容易に認められやう。

同圖(は)は經室の扉である。意匠は(い)と同じであ

第百參拾七圖・唐招提寺講堂扉一部



第百卅八圖・長弓寺本堂格唐戸一部・大正十三年三月廿九日・天沼写真



第百卅九圖・萬壽寺壽萬堂格唐戸壹部

大正十五年二月九日・天沼写真

第百四十圖……鹿苑寺金閣第參層兩折兩開板唐戸（内部より見る。）

第百卅壹圖・京都府綴喜郡田邊町・酬恩庵本堂背面扉一部

大正十五年十月十日・天沼寫眞

るが、中竪桟がないからずつと簡單である。最上の間に入れてある格子の目は、前例のが横に長手であつたのに對し、この方は少しくたてに長いだけの差である、夫れともう一つは、格子の木が其目の小さい割に太く、さうして面が大きい。前例の割だと0.03位でいゝのに、これは0.04ある(へ)。

天竺樣として古いのでは、この他に播摩の淨土寺を擧げねばならぬ。前記の如く本堂の方は再建だから姑くおき、今淨土堂の扉についてみるに、當初の扉と思はるゝのは正面には一枚もなく、兩側面ののうち、南側のは駄目で、北側のが今あるうちでは一番古い。古いには古いが勿論當初のものではなく、ことによつたらもう一時代降るのではあるまいか、と思へなくもない(第百三十三圖)。

此の扉は7.9×4.42、桟の厚.255づゝある二枚の兩開のもので、面の工合等もなかなかよく出來てゐるが、材料もおちるし、どうもさう古いとは考へられぬ。この扉の上部には竪に.07角の子を12本を等間隔にたて、横に4本(うち2本は中央に吹寄にある)同じ太さの子を組合せたものから成つた格子が入れてある。若しこの全體が當初の式に倣つたものならば、法隆寺堂塔の勾欄と同樣に取扱得るのであるが、これはどうも落つかぬ。何だかあとから勝手につくつた樣な氣がしてならぬ。だからこれは先づ考へに入れぬ方がよからう。私は扉全體としては原通りにつくつたが、上の格子は以前經藏式の四角なのであつたのを、この扉をつくる時分に今の樣にして了つたのではないかと思つてゐる。

東大寺の南大門には、上の方の大きな蕚座(此の圖次號に掲ぐ)が打つてある丈けで、肝心の扉がないから問題にならない。

次に東大寺良辨堂である。こゝには二種の扉が用ひてある。第百三十圖ち・り・ぬ第百三十二圖る・を・わの如く內外で差があるのである。

㋒は内陣佛壇前の棧唐戸である。この棧は圖の如く中央に明らかな鎬がある、但し其兩方は切り取つた樣に一平面ではなく、幾分の起りがついてゐる(㋩)。軸元框は正立面圖では同じ樣に見えてゐるが、幾らか異なつてゐるのは㋝に詳細圖がでてゐるので判るであらう、だからこの方は別とするも、其他の框や棧の手法は、餘程意味が異なつてゐるのである。

斯樣な唐戸は天竺樣の一特徵かといふと、さうでもないやうである。其一例として第百三十八圖に長弓寺本堂（奈良縣生駒郡北倭村（キタヤマトムラ）大字上（カミ）所在）の外陣扉の一部を掲げておいた。此の建物は和樣であるのに扉は良辨堂のと同樣である、だからどうも天竺樣の特徵とはいへぬ。尤もこの堂は弘安二年ださうだから、良辨堂が建長二年なら、夫れより後のものたることは言ふ迄もない。故に鎬附の棧は初めは天竺樣にのみ用ひられたが、後になると木鼻等と同じ樣に私樣にも使つたのだと解釋すればいゝけれども、良辨堂にあつたからとて、あながち天竺樣のものとはいへないと思ふ。時代はやはり後れるが、唐樣にも用ひてあるので、これも亦なかなか難しく、つまり私には今のところまだよく判つてゐぬのである。

私は鎌倉時代若くは鎌倉を距る遠くないと認めらるゝ石の寶塔の塔身に、鎬附の框及棧をもつた唐戸が薄肉に刻み出してある例を相當にみた。一つや二つは直ぐにも所在地を擧げ得るのである。其一つには、一番上の間には盲連子、其下の間は普通の場合ならば中竪棧が通つてゐるのに、さうせずして盲連子の間と同じ大さとし、そこへ雲にのつた日月を浮彫にしたのがある（奈良縣吉野郡黑瀧村大字鳥住、鳳閣寺廟塔塔身正面に彫刻せる棧唐戸の例）、これを以てみても鎬附の棧唐戸は割合に歡迎されたものと見える。

内の扉は鎬があるのに、外側のは第百三十一圖

㋱の如く、あたりまへの唐戸面がとつてある棧唐戸で、これなら第百三十七圖のと同じて、少しも珍らしくも何ともない。この扉も亦切縮めた形跡がある。だから圖には下の方を點線でのばしておいた、まだ自信のある復原圖をつくる迄に研究がしてないから。

大正十三年一月七日、奈良縣技師岸熊吉氏と共に良辨堂を見たことがあつた、此の時に同氏から次の樣な話をきいた。『先年東大寺で此の堂の修理を思ひ立ち、奈良縣に工事の監督を委托したので、縣でも注意を怠らなかつたら、床板を剝したとき內陣柱の根元のところで地貫が組合はしてあつて其鼻が柱の外に出でゝ、そこには天竺樣に普通みるところの繰形がつけてあつた、だから當初は多分今日の樣に床板をはつたのではなく、床は石か瓦を敷いたか又は漆喰で固めてあつたのではあるまいか』と。さうして『初めから床板をはつたのなら見え隱れのところへ、丁寧に鼻繰などをつける必要はなからう』と附加へられた。

私は出來るなら何とかしてもう一度そこを見られぬかと尋ねたが、いけなかつたから夫れは諦めたが、兎に角さういふ確證がある以上、初めは床ははらなかつたのであらう。果して其通りで、後になつて今の樣に床を張つたから、外側の扉は其時切縮めたまゝ殘つてゐるのである。故に現在は割合に背の低い恰好のよくない、併し古い立派な扉が正面と後面とに吊つてあるのである。其吊元框と手先框の詳細は、同圖の㋮・㋯にかいておいたから夫れで判る筈である。唐戸面は中々しつかり大きくとつてある。

次に示すのは永保寺開山堂のである。永保寺は岐阜縣加兒郡豐岡村に在り、虎溪山といつた方が早い樣である。この開山堂は文和元年だから、建武中興以降を室町時代とする分け方だと、當然次

の時代に入るものである。

禮堂と祠堂とをあひの間で結びつけたもので、後世の神社建築の一樣式たる權現造の元と考へられるものであるが、第百三十二圖に出してあるのは、あひの間から祠堂への入口の扉で、當初のまゝで少しも手は入つてゐぬものである。圖の半分は表、半分は裏をかいてあるし、尙ほ詳細圖もあるから(5)、これ丈けで充分判る筈と思ふが、表は鎬附で裏は唐戸面が取つてあるから、この扉一枚で良辨堂の內外のを兼ねてゐる樣なものである。其表面の鎬の工合は、詳細斷面圖でみる通り、あの場合とは少しく異り、恰も歐羅巴の建築に用ひらるゝ「四心拱」(Four centered arch) の如き曲線をなしてゐる。詰り良辨堂の起(ムク)りにもう少し抑揚がついたやうなものである。此の方が建立の年月が後れる丈け、其形も充分研究され洗練されて漸くよくなつてきたのである。

此の扉に於いてもう一つ注意すべきは、最上間に入つてゐる「花狹間」である。即ちこの場合は前數例の如く、格子でも連子でもなく、骨となるべき棧を45°に正方形をなす如く組み、四間一花の割でそこへ花模樣をつけたのである。花模樣は扉の場合には大概骨と一木卽ちくり出しにしてあるし、また欄間などでは小さく木片を所要の形に削つてこの形をつくり骨へ糊づけにするのである。この場合にはくり出しだから大層手間がかゝつてゐる。手間はかゝるが夫れ丈けのことはあるのでいつ迄も割合に壞れずにゐるが、糊附のになると新しい間はいゝが、古くなつて糊氣がなくなると風が吹いても落ちるのである。だから終ひには骨ばかりになるのは免れぬ運命である。だから欄間の樣な動かぬものならまだいゝが、扉に糊附のは到底用ひられぬのである。

私は何故にこの扉を圖示して可なり長い解說を

かいたかといふと、良辨堂の二種の扉をこの一枚で兼ねてゐるのと、花狹間を入れてある上に、建築其物は唐樣の代表であるからである。即ち鎬附の棧や框は和樣にも唐樣にもあるし、上の間は格子や連子許りでなく花狹間のときもあるといふ事を、實例を以て示したのである。併しながら、遺物は天笠樣に用ひられてゐるのが最も古く、和樣や唐樣のはこれに亞ぐものであるのは注意すべきである。

今から十七年前、明治四十三年九月二十二日、私は讃岐の國分寺へ參詣したことがあつた。其本堂は鎌倉時代のもので、正面の出入口には棧唐戸が吊込んであり、さうして其唐戸には上の方の間に同じく花狹間が入つてゐたと記憶してゐる。此の記憶が正しい上に、花狹間が當代のものであつたら、此の時代のこの例をもう一つ附加へることが出來るのであるが、もう一度見直す迄は何とも言へぬ。ほかに私は今この種の實例の持合のないことを遺憾とするものである。

第百三十一圖㋕また當代のものである。これは同圖㋔と同じ樣であるが、框や棧には切面がとつてあるから割合に簡單である、さうして横の棧が三個所吹寄になつてゐる。最上のが「上框」、最下のが「下框」で、其他のが「中棧」といふ名で呼ぶときは、連子下のが一個所丈け吹寄棧で、あとはさう簡單にはいへないが、さう杓子定規にいかなくとも、横が三所吹寄棧になつてゐるとしてよからう。序に斷つておくが、この場合に盲連子は最上の間にはなくて、其次の間にある。最上の間は棧が吹寄になつてゐるから、狹くて連子等は入らない。室町以降の禪宗建築の方丈の正面中央の兩折兩開板扉は、最上の吹寄棧の間の入子板には、殆んどきまりきつて極く簡單な透彫がしてある。こんな風だから、最上の間には連子又は花狹間が入

つてゐるとしても、事實最上の間は棧が吹寄になつてゐる場合には當欠まらぬのである。

同圖㋐は軸元框から圓形に軸をくり出したもので、この軸が藥座に入つてそこで開閉する樣になつてゐる。第百三十九圖は下の方の藥座へ、この圓い部分の先きの方が入つてゐるところが示してあるのである。此の扉は古くなつて風雨に曝されて、大分に荒びてゐるのと、入子板がずつと奥の方に引込んでゐるから、裏の方に面をとる丈けのセキがない。だからあけたときには、繪でもかゝぬ以上割合に淋しいが、閉めてあるときは、日光がさすと、深い蔭を板の面に投げるので、大變にはつきりと見える。此の建物は小さい八角堂であるが、中なかいゝできである。鎌倉時代の中葉を降ることはあるまいと思はれる。

物が餘り簡單だし、圖が餘計になり過るので控へておいたが、法隆寺食堂の扉また一つの異なつた例とすることができる。此の扉は上下左右に框がある丈けで、内には一本も棧はない。卽ち一面の板張である。此の樣なのは、一見板唐戸の部に入れておいてよささうであるが、これは棧唐戸の棧を全部略してしまつたとした方がよからう。食堂其他はいふ迄もなく奈良時代の建築であるが、鎌倉に手を入れたとき、扉を全部かうしてしまつたのではあるまいか。建築が古いのだから、扉も餘程考へてかうしたのではなからうか。

東大寺法花堂の前の方の五間二面の禮堂は、和樣と天竺樣とを折衷した優秀な建築である事は、今更改めて記す迄もないと思ふが、其扉また法隆寺食堂式で、框丈けで棧を略してあり、さうして此の場合には上部に連子が入つてゐる。其點に於いて食堂のより一歩進んでゐる。强いて難癖をつけるならば、連子が少しく細きに失してゐる樣で幾分堂の細部手法と調和がとれぬかとも思はれな

くもない。けれどもこれは食堂のに亞いで込み入つた形式で、例は不適當かも知れぬが、この兩扉の割合は、科栱でいふと舟肘木と大斗肘木との關係位であらうと思はれる。

其他第百三十一圖には左の方の一行れ・ろ・つ等に、唐戸面又は切面をとつた桟の詳細斷面を掲げておいた。ろ卽ち不退寺本堂のがこれ等のうちでは一番後れるので、南北朝位であらう。先以上で實例は一通り盡したつもりである。そこで當代の桟唐戸をかいつまんで書いてみると

桟及框の兩面又は片面に切面及唐戸面をとり、または面をとる代りに著しい鎬をつけたものがあり、或は一面は鎬附、他面は唐戸面をとつたのもあつた。横桟が吹寄になつたのは間々あるが、縱横共吹寄のは稀である。上部には格子*・花狹間又は連子を入る。軸元框には軸摺*の部分を取付たもの、又は其部を圓形に繰り出したもの等があつた。入子板は普通各間毎に嵌入してあるが、時には表丈けが桟になり、裏は一面の板になつてゐるのや、稀に上下左右の框丈けをつくり、內はたゞ平たく板をはつたのなどもあつた。彩色を施してある場合には、連子は綠青其他は丹(但し面は黃土を塗つてある時もある)を塗る。禪宗建築に用ひてあるのは常に素色で、色彩を施さない。位のところでは如何であらうか。

* 多く天竺樣の場合、上醍醐經藏の例をとる。

** 京都市萬壽寺愛染堂扉の例、第百三十二圖か。奈良市東大寺三昧堂扉またさうである。

*** 法隆寺食堂扉の例

**** 永保寺開山堂の例、第百三十圖。

室町時代

は前代の繼承であるし、大して變りはない。第百三十一圖ねに示した東大寺大湯屋の如き、其最もいゝ例の一とすることが出來る。

兵庫縣加古郡鳩里村所在、刀田山鶴林寺(加古川驛から

高砂行の汽働車へのつて二驛目の北在家で下ると直ぐ前が寺である）本堂は、應永四年の建立で七間六面單層入母屋の可なり大きな建物であるが、正面全部七間、兩側面五間づゝ、背面四間、合計二十六間のうち二十一間に棧唐戸を吊込み、殘りの五間丈けが板壁になつてゐる、だから一寸みると扉ばかりの建物の樣に見える、その上に總ての扉の棧も框も皆な鎬づきで、良辨堂・長弓寺本堂・永保寺開山堂の扉の系統でさる。この有名な折衷式の最も發達した建築に、この種の棧唐戸が用ひられてゐるのは面白いことである。而も夫れ等が正側面（背面も）に亙つて、殆んど各間全部にあるのだから、開いても閉ぢても甚だ美事である。尙ほ此の扉の上の間は、盲連子が入つてゐるが、花狹間とちがひ、此れなら和宋折衷を、こゝにも見せてゐるといへるであらう。

第百三十五圖は鎌倉にある有名な建長寺の境內にある照堂(Shō-dō)の扉である。此の堂は長祿二年の建立ださうであるから、鶴林寺の本堂よりは六十四年後れるのはいふ迄もないが、扉は割合に花車で薩張としてゐて、圖でみてもなかなか恰好がよろしい。人によりすきずきがあるから一概にはいへぬが、私は此の種の鎬附のでは最もいゝ形だと思つてゐる。扉の樣なものにいゝ形といふのは變かも知れぬけれども、どうも工合がいゝのである。私はこの扉を褒める適當なる言葉が今見出せぬのである。少し變だが秀高といふ形容詞はどうであらうか。棧や框の繰形等も水平斷面圖によく現はれてゐるのをみると、永保寺のゝ樣に幾分のふくらみのないのは物足りぬかも知れぬが、良辨堂のゝ樣に棧や框が平たくなく、寧ろ前後にのびて左右に平たい、だから框や棧が深い影を入子板の面に投げるので、出たところと引込んだ部分とが明瞭に區別されるから、一層垢拔がしてよく見えるのであらう。

第百三十六圖㋐――㋔・㋓は其一部詳細――は當代から江戸へかけての方丈正面中央扉の代表的の型である。多くの説明を要せざる事と考へる。

第百三十四圖は東福寺三門上層棧唐戸の圖である。普通の型で極く平凡ではあるが、扉軸摺上下の蕊座及び中央召合せのところの上下に打つてある定規緣に相當する押への木をとめる爲めの座の詳細を示しておいたのは、當三門が現存の完全なのでは一番古いし、其上に扉も何もそろつてゐるから、これを以て此の種の門扉を代表せしめたつもりである。

次はこれもまた鶴林寺本堂と同年である應永四年の鹿苑寺金閣第三層の扉を引合に出す。第百四十圖は內部からみたところの半分で、これは兩折兩開であるが、手先の扉は軸元のより少し巾が狹くしてあるのは、いゝ考である。若し同し巾だと殊に外側に餘地が澤山ない樣な場合――例へば外が狹い椽か何かのときなど――には、この樣に外方へ二度開くとすると、抱き込まれた手先がつかへて思ふ樣にあかないが、かうしておくと、樂に餘計あけることができるのである、扉を二つとも同じ巾にしなければならぬ理由少しもない。尤も斯樣な考へは既に早く平安時代からあつたので、かくのを忘れたが前號に一寸かいた白水阿彌陀堂正面中の間のがさうなつてゐる（第一二二頁下段初めの十三行）、併しながら實をいふと、この建物の樣に半ば住宅的のものでは、反て斯樣に巾をかへた方が、餘り堅苦しくなくてよく見える。

扉の上の方の連子を入れるところは、これでは後世の簇欄間の樣に、横子は上下に一筋、中に二筋入れてある。これで竪子の間隔がもつと狹ければ正に簇欄間である。これは中々上品である。花頭窓の後ろに入れてある明障子の竪横の子とよく釣合がとれてゐる。さすがに邸宅と佛寺との融和

折衷建築丈けあつて、このあたりのこなし方は頗る垢抜けてゐる。寫眞に見えてゐる縱横の線は金箔の境の線である。金の板唐戸は中尊寺金色堂のに先輩があるが、小さい工藝品等は別として、ほんとうの建築に用ひてゐる金の棧唐戸は、多分これが先祖であらう。

慈照寺銀閣は文明十五年で金閣より大分おくれるが、これは銀扉の最古の例である。扉其物は普通の花狹間入の棧唐戸で、扉としては別に珍らしくもなく、いはゞ平凡である。

京都府綴喜郡田邊町大字薪に一休寺といふ名の寺がある。但し一休寺といふのは俗名で、ほんとうは酬恩庵といふのであるが、其本堂は特別保護建造物で、三間三面入母屋造檜皮葺の建物。京都府下に於ける唯一の古い純唐樣建築である。正面中央に一個所、兩側面に一個所づゝ出入口があつて、そこには上下とも蓮座に入つてゐる兩開棧唐戸がたつてゐるが、上には花狹間が入れてある、さうして框及棧の面は几帳面である。几帳面といふのは唐戸面の樣でもつと角張つてゐるもので、几帳にとつてあるところから、斯く呼ぶが、多くはほんとうの几帳面でなく、少し崩れてゐるのである。尙ほ出入口は後面にも一個所ある。こゝに吊込んでゐる兩開棧唐戸は、他のところのより背は低いが、少し趣きが變つてゐる。

第百四十一圖は二枚のうちの一方の全體をみせたのである。上部の花狹間や連子を入れるところに、菱形を刻みつけた板が入れてある。ところが其菱は幾つも重なつてだんだんに少さくなつて中心に及んでゐるので、卽ち長方形をしてゐる一區域の中央に菱をつけたのだから、四隅は自然まん中につけた菱の$\frac{1}{4}$のものになる。この四隅の$\frac{1}{4}$のところにも亦、中央の菱と同じに取扱つてある。卽ち菱の面は、其斷面が鋸齒狀をなす樣にしてあ

るので、これは縦又は横に盲連子を入れる代りに夫れをたゞ幾分の勾配を持たした丈けのことである。換言すれば縦及び横の中心を結びつけた線に平行させて連子をおいたと見ればいゝので、かういふ菱をなんといふのか知らぬが、大分に珍らしい意匠の樣であるが、實は盲連子と同工異曲である。

格狭間の内に竪連子を入れることは、東大寺三月堂の本尊臺座の例は別として鎌倉以降よくある。初めの間はおとなしく縦に丈け洗濯板を入れてゐたが、漸く後になると、たゞ縦丈けでは平凡だといふ樣な考へからであらうが、一部分を斜にしたのがある。どうも横にしては變だからかういふことを按出したのであらうと思はれるけれども、どうも餘り感服しかねる。菱形に取扱つた連子また然り。併し乍らこれを以て竪連子と全く同じものとして取扱ふのは不都合である、だからこれ等は當代に於ける一種の手法としておく方がよからう。

同じ建物の側面の扉の上の方には吹寄の菱格子が入つてゐたと記憶してゐる。實は最初にみたとき大變に新しかつたので、いづれ修理の時入れたこと丈けは確かであるが、古いのが幾分殘つてゐたか殘つてゐなかつたか、全くの想像で入れたのか或は何か證據があつたのか、其邊のところはつい氣をつけなかつた、あとでよく見やうと思つてゐるうちにいつも忘れて歸つて了ふので、こゝに遺憾ながら確言出來ぬ。けれども兎に角吹寄菱格子があつたこと丈けは間違ない。假に全部想像で復原したとしても、無論あつて然るべきである。故にこれもまた一つの手法である。

此の他にどんなに變つたのがあるかも知れないが、私はつい氣をつけてゐぬので、今記載する材料をもつて居らぬ。尤もあつたところで大した事

はあるまい思はれる。そこで當代のは

鎌倉時代のと似てゐる。方丈正面の兩折兩開棧唐戸等は一つの型に嵌つて了ひ、永く範を後世に垂れたのである、上の間に嵌込む連子は花狹間又は盲連子を普通とするも、時には少しく異りたる意匠を用ふる等、多少かへたのもあつた。或はまた此の部に格子を嵌込み、筬欄間の如く横子を吹寄せにしたり、全體に金箔や銀箔をおいたりしたのもあつた。時としてはまた吹寄菱格子を用ひたりした。

といふ位のことにしておき、此の後變つた種類が澤山出てくる樣であつたらば、いつかまた書き直すかどうかすることにしておかう。夫れで室町迄は先づこんな風で、引くるめていへば鎌倉の延長であつたが、次の

桃山時代

には再三記した樣に彫刻充塡式が扉にまでも及んだ結果、入子板の面にはむやみに薄肉彫刻を嵌込み、また框や棧の辻には金具を一ぱいに打つことになつた。勿論簡素なのも存在はしたが餘り喜ばれなかつた樣である。板扉も亦同樣の理由により衰微したのである。

＊　＊　＊　＊

以下例の如く實例を擧げて記載するのであるが、板扉もちがつて代表的のもの丈けでも五つや六つはある。其上江戸時代のまで入れると文句も相當に長くなるし、圖版も大分にますことになる。實は前回に少し長過ると思つたが、きりが惡いのであれ丈けかいてしまつたのであるから、今回は遠慮してこれ丈けにしておく。尤も圖版を小さくしたり減じたりすれば江戸迄すまなくもないが、夫れでは何にもならぬから、もう一回のばして、四月には桃山・江戸時代のを圖を以て說明し、其他に「唐居敷」と「藻座」とをつけて解說をして、前後三回を以て扉を終ることにしやうと思ふ。

＊　＊　＊　＊

前號第一二三頁上段八行目より九行目にかけて、『奈良時代の定規緣の現存してゐるのは未だ見たことがない』とかいたが、東大寺法花堂の板唐戸には巾.38×厚.14のがついてゐ

る。厚.24の扉の一方に、.28丈け其扉につき殘りの.1が他方の扉の遊離端を覆ふ樣にできてゐる。但しこの定規縁は當初のものであるか、又は鎌倉に禮堂やあひの間をつけ加へたときに附け加へたものか、其邊のところは未だ明言できぬ。尤も扉もこれも同じ位にふるびてゐるから、其經過の年代は同じと見られなくもない、だから扉が當初のものならこれもまたさうである筈である。其上大分に磨滅もしてゐるから、旁古いと見てよささうだが、たゞ其兩端にとつてある面が、どうも少し巾が狹ま過る樣であるから、もう少し調べるまでたゞかういふ例があるといふ報告にとゞめておく。私の不注意で前號にあゝいふ風にかいてしまつたから、こゝに訂正をしたのである。

序にもう一つ

同第一二六頁下段五行目より九行目に至る五行は、筆が滑つて少しく書き過ぎた樣である。ことによると大方諸君から抗議が出るかも知れぬから、左の樣に書き直しておく。

『其文樣のうち、寶相花唐草や牡丹唐草は、普通の場合とは描き方が少し異つてゐるので、殊に後者は大和吉野廢世尊寺鐘——俗に三郎の鐘といふ——の上帶にある唐草を思はせるものである。あの唐草も便化した寶相花又は牡丹であらうが泰西の古建築其他に盛に用ひられたるAcanthus唐草の樣に見えるのであるが、何れにしても此の塔の唐草模樣のかき方は特に注目に値する。』

（大正十五年十一月三十日稿了・火曜・晴）